**ドラマ『ありがとう』放送に寄せて**

**水前寺清子、長山藍子、石井ふく子ロングインタビュー全文**

――最初に、BS12 トゥエルビで放送中の第三シリーズの見どころを教えて下さい。

**水前寺清子（以下、水前寺）：**結婚式ですね。ああいう形もあるんだなと。あったかい結婚式ですね（※1）。第三シリーズは、お母さん（山岡久乃）がものすごく優しくて、石坂さんがふわっとした役で、たいぶそれまでのシリーズと雰囲気が変わっています。キャラクターの変化も見どころです。

それから、すごく感謝しているのは、魚屋さんのシーンです。そこだけ朝一番から撮るんですよ。なぜかというと河岸へいって、新鮮な魚を用意していただいていたからなんだそうなんです。あとで聞いてびっくりしました。知ったのは、放送が終わって相当経ってからですよ。それを知ってから観ると、面白いかもしれません。

――長山さんは、第三シリーズに関しては？

**長山藍子（以下、長山）：**私は、『ありがとう』は、全シリーズ含めて全てでひとつの『ありがとう』だととらえています。良いメンバーで、脚本もテンポがあって楽しく良い現場で演じさせていただきました。

――約40年前のドラマですが、今のドラマには無いぬくもりがありますよね。振り返ってみて、お三方はこのドラマにどのようなぬくもりを感じますか？

**水前寺：**家族はこうではないといけない、近所付き合いはこういうものだなと、見ていてよく思います。時代が変わってしまったと言ってしまえばそうですが…肝心なところは『ありがとう』を観ていただいて（笑）

いま、毎日帰ってからこのドラマ見るのが楽しみです。物も増えたし、便利になった…だからこそ、改めていろんな人に見てほしいドラマですよね。ありがとうという言葉が、大きな意味をもっている。

**石井ふく子（以下、石井）：**私は、感謝するというこの「ありがとう」の言葉は永遠に変わらないと思います。

**長山：**『ありがとう』というタイトルになさったということが、すごいことですよね。

**水前寺：**そういうタイトルはなかったですもんね。びっくりしましたもん。台本頂いて、「ありがとう」！

**長山：**そういうタイトルもあり得るんだなと思いました。どんなことにも感謝の気持ちを持てば、みんな「ありがとう」と言える。そういうメッセージが込められていると。怒られてもね。石井先生、叱ってくれてありがとう（笑）

――実際にドラマを見てみて、セリフの量が多いなという印象を受けました。いまのドラマは、すぐ次の場面になったりしますよね。

**石井：**テーマが何かわかりにくい。これは、もう、（テーマは）「ありがとう」なんで（笑）

――水前寺さん、石坂さんとのコンビネーションも、三シリーズも重ねていると、息が合っていますよね。その都度キャラクターも変わっているので難しかったとは思いますが…どうでしたか？

**水前寺**：最初のうちは「石坂さんが恋人役！？」みたいな（笑）。慣れてきて、第三シリーズでは石坂さんが気弱な役で、反対に私が強気な役で。全作楽しかったです。

――当時はお忙しかったと思いますが、石坂さんと打ち合わせしたり、こうしよう、ああしようみたいなやりとりは、特に無かったのですか？

**水前寺**：全く無かった。そのときだけしか会わなかったです。本番のときだけのお付き合いでございました（笑）。ドライブを除けば（※2）。

――だから本番で、リアルな表情な感情や生の表情が出ていると？

**水前寺**：私の中では、『ありがとう』の石坂浩二さんしか知りません。石井先生のお誕生日会で何年ぶりかで会うと、岡本信人くんはまったく変わっていない（笑）。みなさんとお会いすると「しばらくです」とはじまり、ぱっと、シーンが浮かぶ、すぐに思い浮かぶ。セリフも覚えているくらい。なんなんでしょうね。やっぱり『ありがとう』が好きだったんですね。

**長山**：私たちはお稽古してリハーサルしてお互い交流していたんですけど、 チータは多忙で一切リハーサルに来られなかったんです。なのに、本番でスタジオに入ると、すぐにお母さん（山岡久乃）と喧嘩したり、石坂さんとうーんと仲良くなって（笑）。新鮮な感性で、受け入れる方たちも、仲良くみんなでやらせてもらった。この人（※水前寺）は全然おびえることなく、役の上で、泣くときは泣く、笑うときは笑う、好きになるときは好きになる…というふうに本当に素直でね。その感性というのは、なかなか彼女にしかないもの。それを、石井先生が口説き落としたっていうのが…

**水前寺**：そのくらい世間知らずだったと（笑）。お母さん（山岡久乃）とのあのシーンは何回見ても泣けます。ワンコーラスを歌いたかったのですが、涙で歌えなかったんですよ。悲しくて。胸がいっぱいになって（※3）。あの元気なお母さんがもういないと思うと、寂しいです（※4）。

――『ありがとう』という作品を、どんな方に見てほしいですか？

**石井**：若い方に見てもらいたい。ドラマ離れしているでしょ、宣伝しようとしても、電車の中でも、中吊り広告は見ていないし、みんな下を向いている。機械と向かい合うのではなく、人と向き合ってほしい。みんなほとんどゲームと向き合っている。

――このドラマに対して何か感謝する点があるとすれば、どんな点に「ありがとう」と言いたいですか?

**長山**：「ありがとう」という簡単なようでいて、すごく膨らみのある深い、ひらがなのタイトルをお付けになった、平岩先生と石井先生は、すばらしいと思う。どんなにチータと石坂さんがやりあっても、母さん（山岡久乃）と水前寺さんがやりあっても、お互いに愛して大事に思うから喧嘩している。単純にも見えるドラマなのに、いろんなことが含まれていますよね。そういう題名をお付けになった石井先生は、すごい度胸があるというか。「ありがとう」というシンプルな言葉はなかなか、心から言えなかったり、簡単に言えちゃったり、奥行きのある、深い意味のある、素敵なタイトルだと思います。プロデューサーは、すごい感性だと思います。

――石井先生は、このドラマを通じて「ありがとう」を感じるとしたら、どんなところですか?

**石井**：出会いだと思います。出会いがなければ『ありがとう』は生まれてこなかった。チータに出会い、長山さんに出会い、いろんな方と出会って『ありがとう』ができた。

――その出会いに感謝の気持ちを送りたいということですね。水前寺さんは？

**水前寺**：ありがとうという言葉が、これほど大事にされている言葉だと思わなかった。ありがとうという言葉を耳にすると「“ドラマの”ありがとうよね！？」と思ってしまう（笑）。そのくらい、いい言葉だし。

今の若い方はゲームがお好きでしょうけど、昔は、『ありがとう』だけは見ていいよと言われた時代もあったので、時間を割いて見ていただきたい。毎日見られますので。思い出深いお父さま、お母さま、おじいちゃま、おばあちゃまにももう一回、名作を見ていただきたい。

「ありがとう」って簡単だけど、なかなか言えない言葉。ステージで「ありがとう」というのは、かなり勇気がいります。いろんな言葉が並べられるけど、最後に「ありがとう」はなかなか言えない。とっても難しい言葉。人と出会って、協力を得たり、愛があったりして、それら全てまとまったのが、「ありがとう」なんだと思います。ステージで最近、やっと「ありがとう」と言えるようになった。なかなか軽々しく言えないんです。

このドラマに出会わなかったら、歌い手としてもこんなに続いていません。『ありがとう』があったから、今がある。本当に感謝しています。ステージでも、みなさん『ありがとう』をご存じなんです。ちっちゃいお子さんも。『ありがとう』ってすごいな。『ありがとう』があるから、今がある。出会わせてくれて、ありがとうございます。

――それぞれの「ありがとう」を聞かせていただいて、ありがとうございました。

（※1）第三シリーズの最終話で、愛（水前寺清子）と元気（石坂浩二）、そして、健二（前田吟）と名津（長山藍子）の二組の合同結婚式が開かれ、マーケット中に祝福されるシーンがある。

（※2）当時、石坂が買った新車でドライブに誘われたが、出発してすぐにエンストしてしまい、結局デートは実現しなかったというエピソードを指している。

（※3）第二シリーズの最終話の途中で、新（水前寺清子）と友（山岡久乃）の母子が、久しぶりに再会するシーンがある。撮影順も最後であったため、水前寺は「これでもう撮影が終わってしまう」と思い、悲しかったという。

（※4）1999年に死去。

**ドラマ「『ありがとう』第三シリーズ」**

**【番組概要】**

東京・東北沢のマーケットを舞台に、店を営む人々との交流を通して描く“ありがとう” のこころ。第一、第二シリーズで婦人警官や看護婦に扮した水前寺清子が、この第三シリーズでは威勢のいい鮮魚店の娘を好演。毎週月～金曜よる8時～8時55分放送。

**【ストーリー】**

老舗鮮魚店の一人娘・志村愛（水前寺清子）は、いまが娘盛り。同じマーケット内に同居する青果店の長男・寺川元気（石坂浩二）が少し気になっている様子で…。

**【キャスト】**

<プロデューサー>石井ふく子 <出演>水前寺清子、山岡久乃、葦原邦子、石坂浩二、井上順、長山藍子、音無美紀子、園佳也子、岡本信人、草笛光子、坂上忍ほか